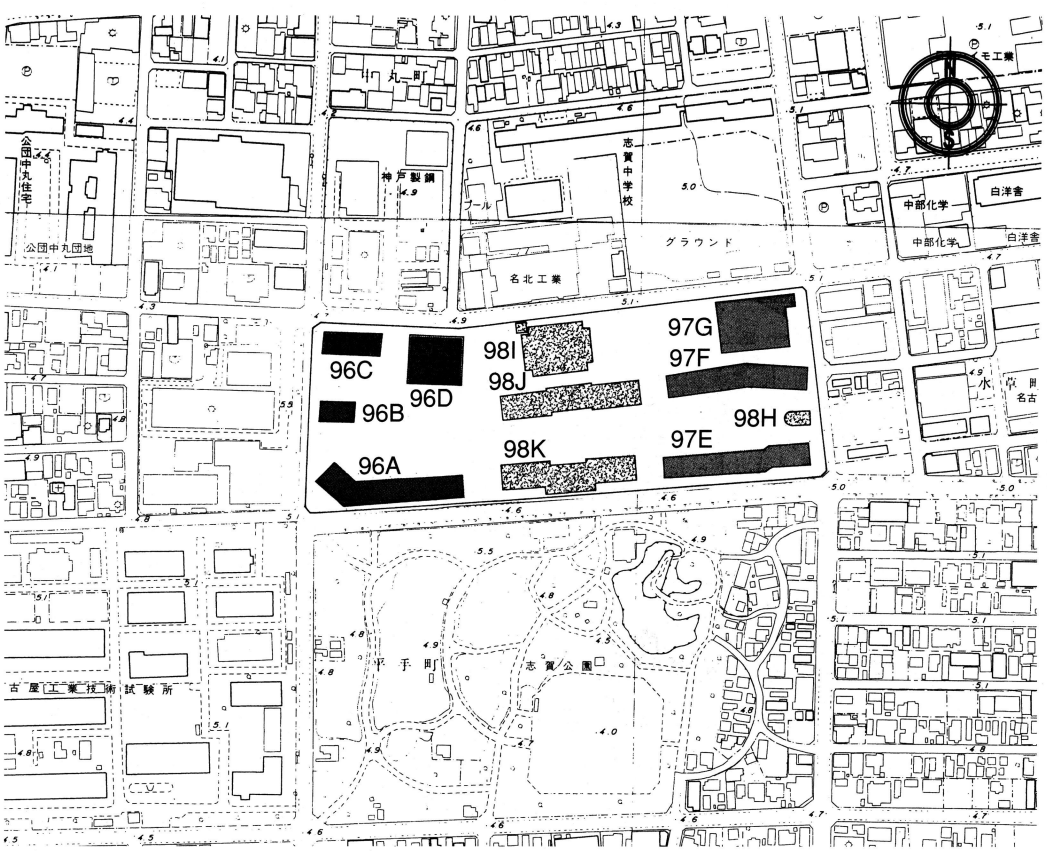
志賀公園遺跡（しがこうえん）

調査の経過　発掘調査は（神戸製鋼跡地名古屋市北区中丸町）における住宅・都市整備公団による住宅建設に伴う事前調査で、愛知県教育委員会より委託事業として平成８年度から実施している。本年度は３年間の調査最終年度にあたる。隣接する遺跡としては、南に志賀城跡、南西に西志賀遺跡がある。志賀公園遺跡としては今回の調査までに志賀公園内（昭和５年愛知県教育委員会、平成５・６年名古屋市教育委員会）と西区貝田町内（平成７年名古屋市教育委員会）にて、計４回の調査がおこなわれている。

本年度の調査はＨ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区の計5,200㎡。ここではそのうちのＩ区・Ｊ区について述べることとする。遺跡の基本層序は、第１層として客土（神戸製鋼撤収に伴う整地層）第２層：灰色砂質シルト（近世以降の耕作土）、第３層：黄褐色シルト（中世）、第４層：黄灰色粘質シルト（飛鳥時代～古代）、第５層：オリーブ灰色細粒砂（河川の氾濫における堆積層）、第６層：黒褐色腐植質粘質シルト、第７層：黄灰色粘質シルト（古墳時代中期）、第８層：灰色粘質シルト、第９層：黒褐色粘土（弥生時代中期）、第10層：暗灰黄色粘質シルト（基盤層）である。検出された遺構・遺物は弥生時代中期、古墳時代中期、飛鳥時代～古代、中世以降の４時期に大きく区分できる。また遺構検出は、弥生時代中期は10層上位、古墳時代中期は７層上位もしくは８層上位、飛鳥時代～古代と中世以降は４層上位もしくは５層上位でおこなった。



第１図　調査区位置図（１：5,000）

調査の概要　本年度の調査の概要は過去２ヵ年の成果を踏まえて、弥生時代中期をＡ期、古墳時代中期をＢ期、飛鳥時代～古代をＣ期、中世以降をＤ期として、以下述べることとする。

Ａ期の遺構と遺物　昨年度方形周溝墓や松菊里型住居が確認された調査区のＥ区から北西方向に延びると思われる微高地上に位置する本年度の調査区Ｉ区・Ｊ区では、方形周溝墓17基、竪穴住居３棟、掘立柱建物４棟などの遺構を確認した。

方形周溝墓は、５ｍ×５ｍ前後の小規模なもの13基、７ｍ×10ｍ前後の中規模なもの３基、一辺20ｍ超の大規模なもの１基を確認した。その景観は、大規模な方形周溝墓（ＳＺ27）に少々間を置いた位置に中規模なもの（ＳＺ11・12・21）と小規模なものが配置している。

周溝は、大規模なもの（ＳＺ27）は幅５ｍ強、深さ１ｍ強であり、中規模なもの（ＳＺ11・12・21）は幅1.5～2.5ｍ、深さ30～50㎝であり、小規模なものは幅60～80㎝、深さ25㎝前後である。一辺20ｍ超の大規模な方形周溝墓（ＳＺ27）は、後に一辺10ｍ前後の２基に造り替えられている。主体部はＳＺ19・ＳＺ27で検出され、それぞれ170×110㎝、230×120㎝程の組み合わせ式木棺の痕跡を確認した。このほか、ＳＤ149は埋土の中位に遺物片を伴う炭化物層が堆積、溝中央部に溝内埋葬を行った可能性がある。

建物は、Ｉ区では両面棟持柱を伴う１×５間の掘立柱建物（ＳＢ19）、Ｊ区では２×４間（ＳＢ21）、１×２間～（ＳＢ23）１×３間（ＳＢ25）の掘立柱建物が確認できた。ＳＢ19は柱穴が径35～45㎝、深さ30㎝の棟持柱と径70～90㎝、深さ45㎝の柱を持つ規模であり、Ｊ区の掘立柱建物の柱穴規模（径20㎝、深さ20㎝程）と較べて特に際だった存在の建物であったと考えられる。このことは、墓域の中に存在する大型建物のＳＢ19が、特異な存在であったことを窺わせる。

遺物は少量であるが、ＳＺ19の周溝から壷、ＳＤ221から壷、ＳＢ22から甕・高杯、ＳＢ26から壷、ＳＺ27の周溝から石鏃が出土、時期はいずれも朝日式末から貝田町式である。

一辺20ｍ超級の大規模な方形周溝墓は、尾張平野ではこれまで朝日遺跡・八王子遺跡で確認されているのみである。これまでの調査成果から考えて弥生時代における志賀公園遺跡は、この地域における拠点的遺跡と考えられる。志賀公園遺跡の景観復元は、隣接する西志賀遺跡を含めた空間内での今後の検討課題の１つと考えられよう。

Ｂ期の遺構と遺物　帆立貝形前方後円墳（ＳＺ09）の推定規模は、墳長50.0ｍ、前方部長16.5ｍ、前方部幅22.0ｍ、後円部径35.0ｍを測る。その周囲には幅約６～８ｍの周濠が二重に巡っていたと考えられる。現状での周濠の深さは0.3ｍと浅い。堆積層は大きく２層よりなり、最下層は黒褐色シルト層により遺物はほとんど見られない。その上位の下層に部分的に、黒褐色シルトの炭化物層が堆積しており遺物が大量に出土している。さらにこの上位には、黒褐色腐植質粘質シルト層が堆積し、遺物はほとんど存在していない。

今回の調査範囲は、墳丘の後円部にあたると想定される部分が範囲外であるためその様相は不明である。しかし、調査によって確認できた前方部はその隅部に遺物集積（ＳＵ12）が検出されたことによれば、前方部は低墳丘を想定できる。この墳丘の構築に関する

問題であるが、前方部断面等の観察によれば、盛土部分の周辺部に断面三角形ないしは台形の高まりを構築し、その内部に土を充填する土盛り手順を踏んで造成している。また、一部幅の広い堤状の部分でもこのような造成を行っていたと思われる。

帆立貝形前方後円墳の周囲には、周濠が二重に巡っていたと考えられる。前方部側の外の周濠は途切れて陸橋状になっており、一括性の高い遺物集積（ＳＵ10・14）が存在する。また、この外側の周濠を区画するとも考えられる堤の存在も窺える。

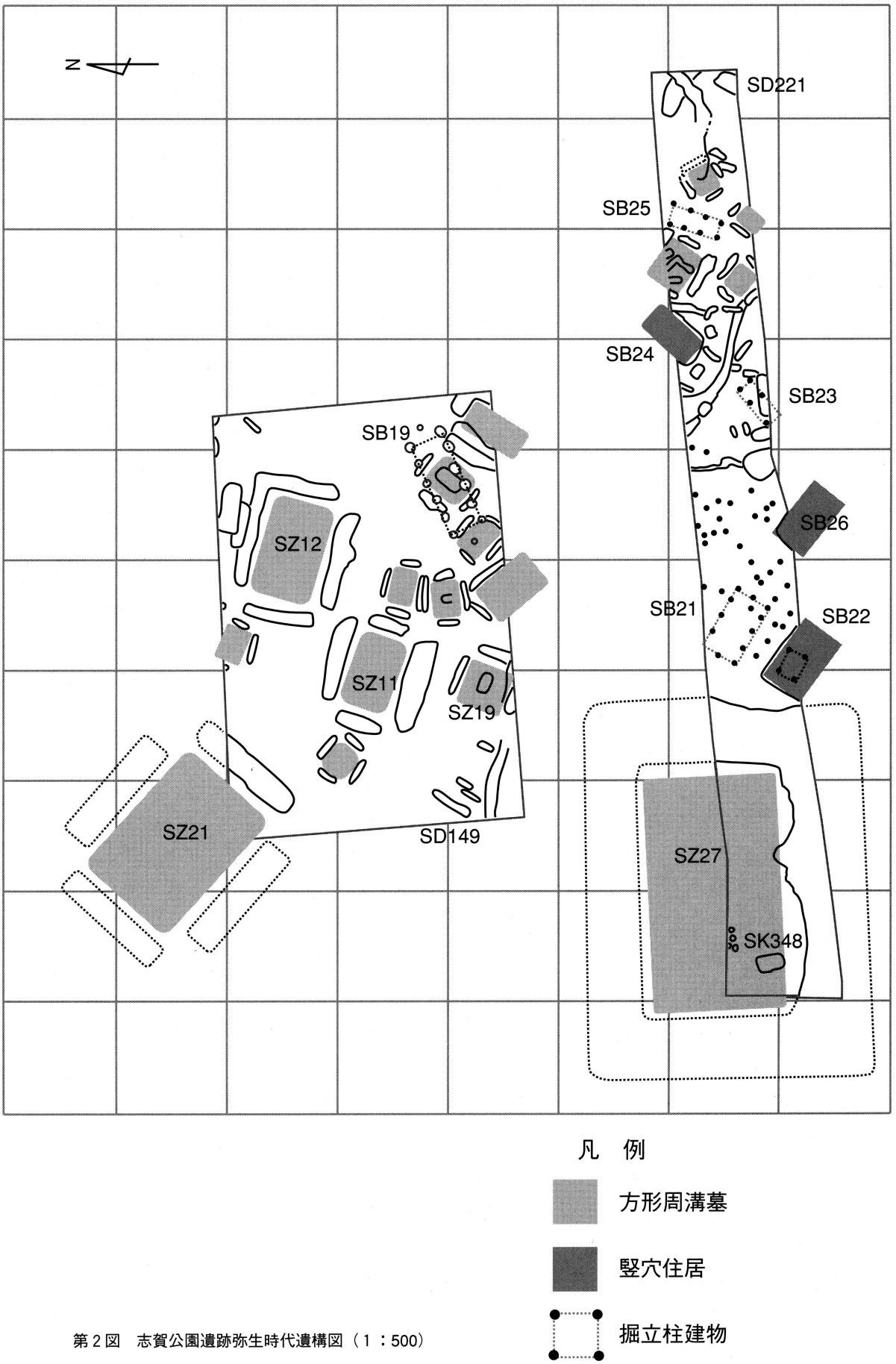
遺物は、墳丘のくびれ部（ＳＵ11）・前方部隅（ＳＵ12）・周堤部（ＳＵ10・13・14）から大量に出土している。なかでもＳＵ１１は遺物とともに炭化物層が広がっており、緑泥片岩の敷き詰められた敷石状の部分が検出された。墳丘のくびれ部に、敷石が施され特異な空間を設けたと思われる。遺物集積の中には、縄蓆紋の施された韓式系土器の壷、須恵器の脚付円窓壷・筒形器台・𤭯・高杯・杯などがあり、これらの時期は東海地方最古段階のＴＫ－７３併行期のものであり、その多くは陶邑古窯群産と思われる。須恵器とともに大量に出土している土師器には、高杯・小型壷・台付甕・杯がある。また、無数の臼玉、有孔円盤、剣形石製品、勾玉形石製品が出土している。遺物集積から出土している土器のなかでは、須恵器の脚付円窓壷が他に例を見ないものであり、また土師器の杯に須恵器の杯が入れ子状態で出土しているものも注目できる。遺物集積地以外からでは、前方部中央先端部より臍穴付鳥形木製品が出土している（＊類品として長野県石川条里遺跡に出土例がある）。また、古墳埋没後の溝からの出土ではあるが、５世紀代のものと思われる鉄刃装着用二又鍬が出土している。

以上のように、５世紀前後から５世紀前葉にかけて、この帆立貝形前方後円墳が造営されていたようである。志賀公園遺跡では、既に円墳が確認されており、円筒埴輪も出土している。こうしたことに加えて、本年度の調査で帆立貝形前方後円墳が確認されたことで、遺跡周辺にこの古墳を中心とした古墳群が展開していたと予測される。さらに、『帆立貝形前方後円墳の採用』・『須恵器』の導入から、この古墳の被葬者は先進技術を駆使できた盟主、つまり庄内川と矢田川合流域に広がる沖積地開発に関与した指導的立場の人物であったと考える。平成８年度から実施してきた志賀公園遺跡の調査成果は、これまで古墳の空白地帯であった庄内川下流域の古墳時代を考えるうえで貴重な資料を提供することができた。今後、庄内川の対岸に位置する白山藪古墳などを視野に入れ、この地域の古墳時代の景観復元が課題と考えられる。

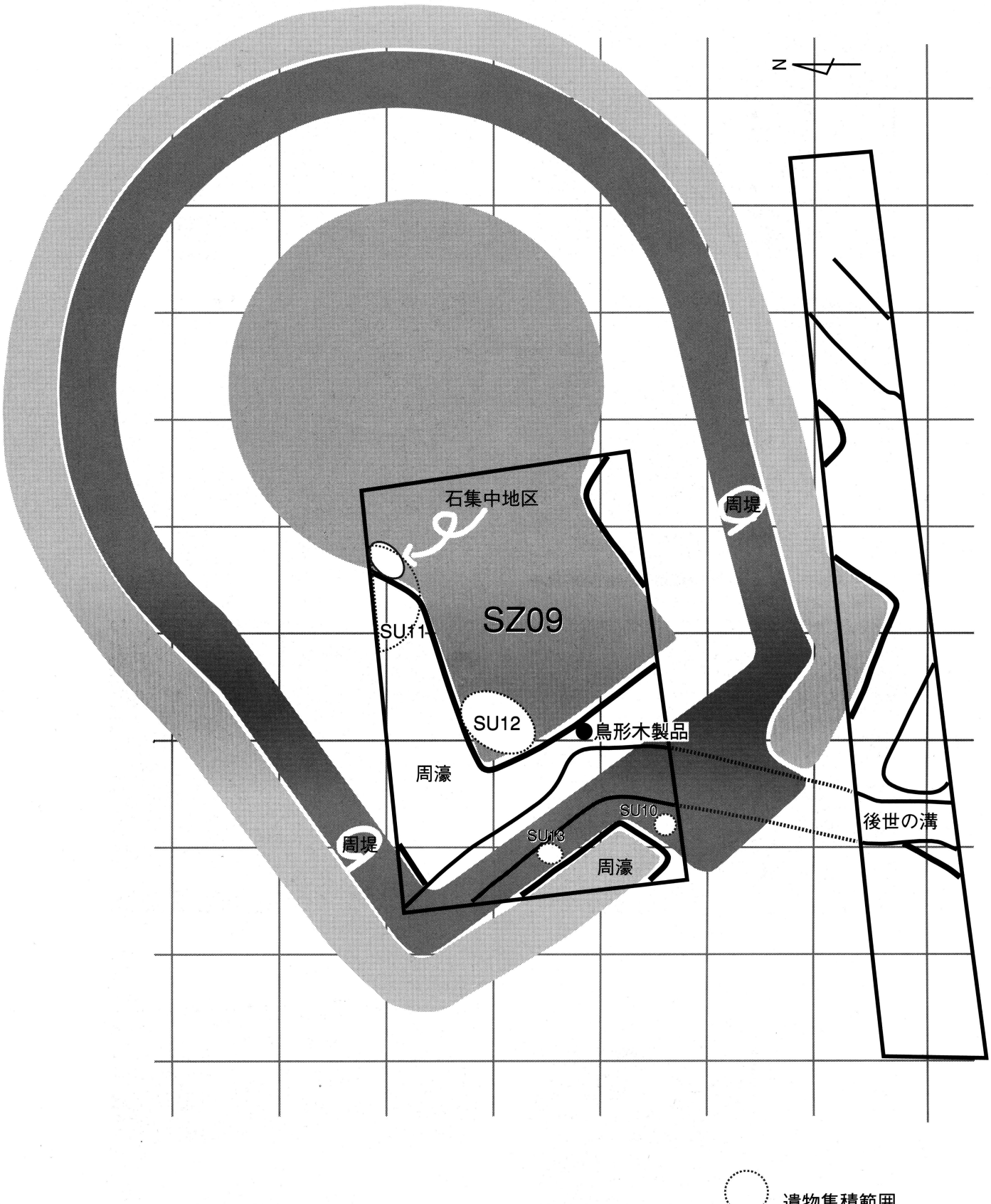
Ｃ期の遺構と遺物　過去２年間の調査成果から、微高地が南東から北西方向へ延びてり、遺構が密に検出されると予測されたが、数条の溝などを検出したにとどまった。また、調査途中ではあるがＫ区では自然流路ＮＲ０７が検出され、その上層の黒色腐植質土から７世紀後半の遺物と共に木簡が出土した。木簡の文字の解釈については、時期も含めて今後の検討課題である。

Ｄ期の遺構と遺物　この時期の遺構・遺物も希薄であり、Ｊ区において屋敷地を区画する溝・井戸などを検出したにとどまった。時期は、14世紀代と思われる。

（小川芳範・魚住英史）



第２図　志賀公園遺跡弥生時代遺構図（１：500）

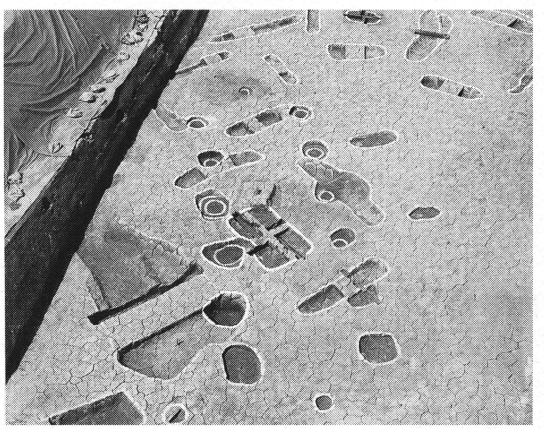


第３図　志賀公園遺跡古墳時代遺構図（１：500）

ＳＺ27完掘状況（98Ｊ区）

Ａ期完掘状況（98Ⅰ区）

竪穴住居・掘立柱建物（98Ｊ区）

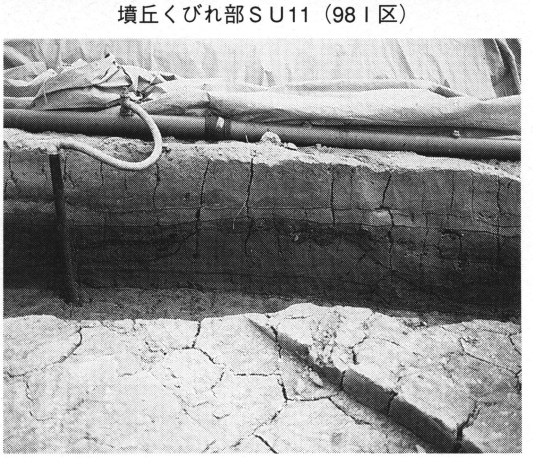


掘立柱建物検出状況（１×５間、98Ⅰ区）

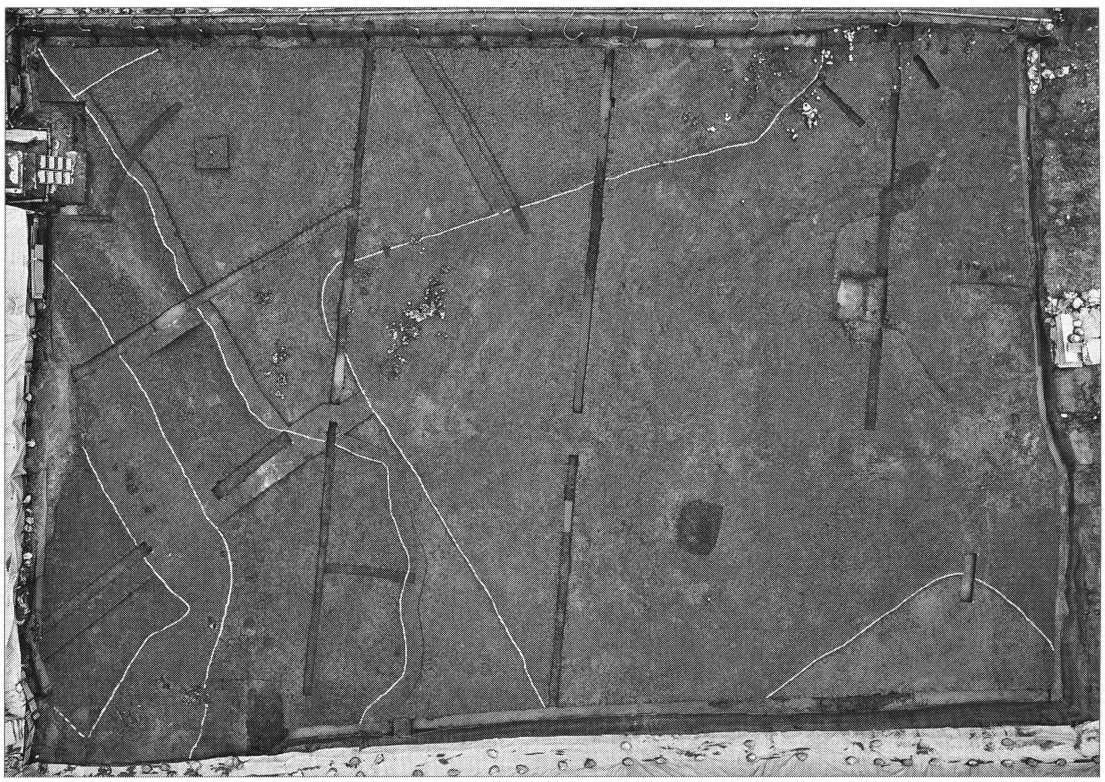
敷石検出状況（98Ⅰ区）

墳丘くびれ部ＳＵ11（98Ⅰ区）

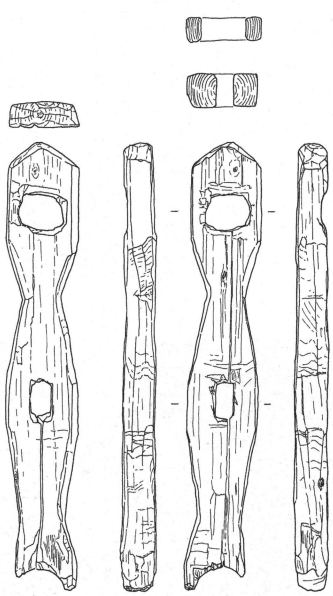
周堤部セクション（98Ⅰ区）



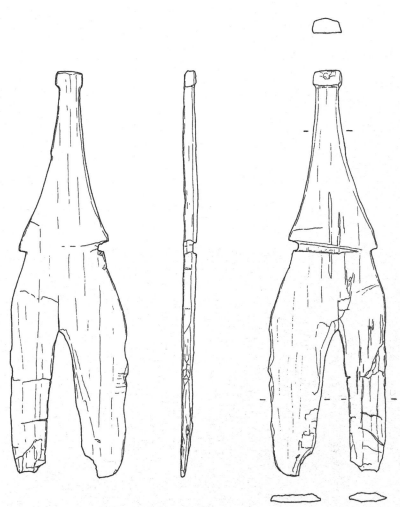
墳丘盛土部セクション（98Ⅰ区）



帆立貝形前方後円墳（ＳＺ09、98Ⅰ区）



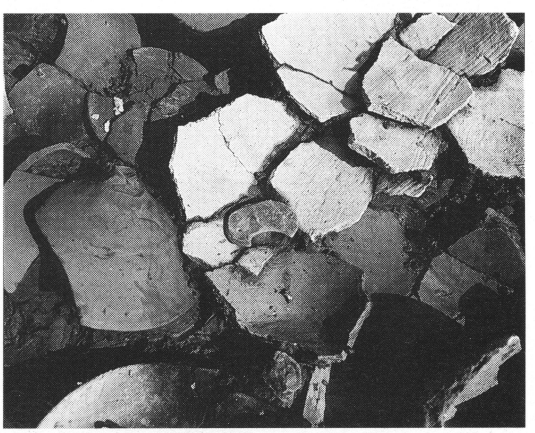
第４図　臍穴付鳥形木製品（１：８）



第５図　鉄刃装着用二又鍬（１：８）

ＳＺ09出土遺物

遺物出土状況ＳＵ13（98Ⅰ区）



勾玉形石製品ＳＵ13（98Ⅰ区）